國學院大學学術情報リポジトリ

A Research on the Odae Bridge Refered in Kashiwagi's Waka in Genji Monogatari

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 太田, 美知子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000832

『源氏物語』柏木の歌の「をだえの橋」

―大原野行幸の浮橋との比較から―

太田　美知子

キーワード
をだえの橋　妹背山　浮橋　ふみまどひ　語脈

一　はじめに

柏木は、宮仕えの決まった玉鬘のもとを、父大臣の使者として訪れる。その折に詠んだ歌は、玉鬘を異母姉とも知らずに恋をして恋文を出してしまったことへの恨みを述べたものである。その中に歌ことばとして初出の「をだえの橋」が詠まれている。

「妹背山ふかき道をばたづねずてをだえの橋にふみまどひける
よ」と恨むるも人やりならず。　（③「藤袴」三四一頁）[1]

この「をだえの橋」について、「新編全集」の頭注（同頁）は「歌枕で陸奥にあり、「（仲が）絶え」をかけた」と説き、一首に歌枕が二語（妹背山・をだえの橋）あることについては「遠隔の地の歌枕二語の使用が、稀有な体験のとまどいを表象」と説明している。

「をだえの橋」が陸奥の歌枕であると解されるようになったのは、『河海抄』が『後拾遺和歌集』所収の道雅の歌「みちのくのをたえの橋や是ならんふみゝふますみ心まとはす」を掲げてからである。[2] ところが、『源注餘滴』は「をだえのはしはとだえのはしを誤れるなるべし」「みちのくの名所としてはおだやかにも聞えず」[3]と不審を述べ、また、奥村恒哉氏は池田亀鑑編『源氏物語事典』の「をだえのはし」の項目において、次のように指摘する。

「をだえのはし」の初出は『後拾遺集』とするが、実際は『万葉集』三八一五「白玉之緒絶者信しかれどもそのをまたぬき人持ちいにけり」の誤読より発したものである。[4]

「緒絶者信（をだえはまこと）」を「をだえのはし」と誤読した結果できた歌枕であるというのである。

三八一五番歌には、陸奥との関わりは何もない。もし『源氏物語』が直接この歌に依拠して「をだえの橋」を歌ことばとして掬い上げたのであれば、「をだえの橋」が陸奥の歌枕として用いられたという理解は成り立たなくなる。だが、『源氏物語』が誤読に気づかずにそれを取り入れたとは考えにくい。また、「白玉之緒絶者信」は前夫の通いが絶えて女が再婚できる状態になったことを表しているので、柏木が三八一五番歌を本歌として未婚の玉鬘との仲を表すのは適切でない。

三八一五番歌の誤読以外で現存文献における「をだえの橋」の初出は『源氏物語』である。それを陸奥と結びつけて詠んだのは、後代の道雅の歌が現存文献では最初である。奥村氏が説くように、「をだえの橋」が陸奥と結びつくことで、三八一五番歌の初句「しらたまの」の玉と「玉造」とが掛けられ、その玉造川にひかれて、「緒絶橋」が宮城県古川市に定着したのであろう。[5]『源氏物語』以前に「をだえの橋」が陸奥の歌枕として認知されていた蓋然性は低い。

柏木は、「をだえの橋」を陸奥の歌枕、固有名詞として用いたのではなく、玉鬘との仲を表す比喩として造語したのだと考えられる。比喩であれば、「を」にも意味があったはずである。柏木の「をだえの橋」を具体的な比喩として読み解き、さらに冷泉帝の大原野行幸の場面に見られる「浮橋」と比較対照する。「をだえの橋」が冷泉帝の「浮橋」を踏まえて造語された比喩であり、柏木の位相を表しているとの観点から、物語の中で柏木が「をだえの橋」を詠んだ意義を明らかにしたい。

二　歌枕「をだえの橋」の成立

「をだえの橋」が陸奥の歌枕として認知されるようになった経緯について考察する。

前掲の奥村恒哉氏の説を、「緒絶者信」を「をだえのはし」と読んだという根拠も含めて再掲する。

「をだえのはし」の初出は『後拾遺集』とするが、実際は『万葉集』三八一五「白玉之緒絶者信（しらたまのをだえはまこと）しかれどもそのをまたぬき人持ちいにけり」の誤読より発したものである。（中略）為家『万葉佳詞』に「しらたまのをだえの橋」あり、これを本歌としたものに、『拾遺愚草』九七〇六、恋二十五首、寄名所恋、「白玉の緒絶の橋の名もつらし砕けて落つる袖のせばきに」とあるから「緒絶者信（をだえのはし）」と訓んだことは事実である。ただし、これが陸奥に用いられた経過は不明。[6]

指摘された『萬葉集』の「緒絶者信」の語を含む贈答歌は次のようである。

（贈歌）白玉は　緒絶えしにきと　聞きし故に　その緒また貫き　我が玉にせむ

（真珠者　緒絶為尓伎登　聞之故尓　其緒復貫　吾玉尓将為）　（『萬葉集』巻第十六・三八一四・送る歌一首）

（答歌）白玉の　緒絶えはまこと　然れども　その緒また貫き　人持ち去にけり

（白玉之　緒絶者信　雖然　其緒又貫　人持去家有）　（同三八一五番・答ふる歌一首）

贈歌は女を「白玉」に喩え、「緒絶えしにき」で白玉を繋いでいた緒が切れたこと、すなわち前夫の通いが絶えたことを表している。そう聞いたので、「その緒また貫き」と、自分が女と結婚したい旨を女の親に申し出た歌である。答歌は、贈歌の比喩「白玉」「緒絶え」「その緒また貫き」をそのまま用いて、女がすでに別の男に嫁したことを伝えている。

贈歌の「緒絶」で前夫の通いが絶えたことを表しているので、答歌が新たに「橋」を加えて表現する必要はない。「緒絶者信」を「をだえのはし」と読むのは、奥村氏が「はなはだ不自然な訓読」と指摘するように、贈歌に呼応せずおかしな誤読である。

三八一五番歌の誤読では、「緒絶者信」は前夫の通いが絶えたことの比喩であり、陸奥との関わりは示していない。この誤読が確認されるのは、前掲の『拾遺愚草』の歌に「白玉の緒絶の橋」とあるのが一番古い。

三八一五番歌の誤読を除けば、『源氏物語』以前に「をだえの橋」を詠んだ歌はなく、『枕草子』の六二段「橋は」においても、十二の

橋の中にその名はない。「緒絶者信」の誤読がたとえ『源氏物語』以前にあったとしても、人口に膾炙していたとは考えにくいので、歌枕として認知されていた蓋然性は低い。

では、『源氏物語』が誤読の「緒絶者信」を用いたとは考えにくいが、三八一五番歌を柏木の歌の本歌とした可能性を考えてみる。玉鬘の呼称に「玉」があり「藤原の瑠璃君」（③「玉鬘」一一二頁）とも呼ばれることから、女を「白玉」に喩えるこの歌との関連性はありそうに見える。しかし、「緒絶者信」は前夫の通いが絶え再婚できる状態の比喩として用いられているので、柏木が未婚の玉鬘との仲に用いるには不適切である。『源氏物語』の「をだえの橋」は、三八一五番歌の誤読に由来するとは考えられない。

「をだえの橋」を陸奥に結びつけた最初の歌は、『河海抄』が掲げた道雅の歌である。そこで、道雅が「みちのくのをたえの橋」と詠んだ理由について考えてみたい。この歌は、『後拾遺和歌集』では一連の四首のうちの四首目にある。一首目の詞書で、道雅が前斎宮當子内親王との間で密通事件を起こして三条院の咎めを受け、会えなくなったという事情を説明している。

①逢坂は東路とこそ聞きしかど心づくしの関にぞありける

（『後拾遺和歌集』巻第十三・恋三・七四八番・伊勢の斎宮わたりよりのぼりて侍りける人に忍びて通ひけることをおほやけも聞しめして、守り女など付けさせ給ひて、忍びにも通はずなりにければ、よみ侍りける・左京大夫道雅[7]）（同七四九番）

②さかき葉のゆふしでかけしその神にをしかへしても似たるころかな（同七五〇番）

③いまはたゞ思ひたえなんとばかりを人づてならでいふよしもがな（同七五一番・またおなじ所に結び付けさせ侍ける）

④みちのくの緒絶の橋やこれならんふみみふまずみ心まどはす

①と④の歌は「つくし」「みちのく」という東西の果てにある地名を詠み込んでおり、呼応関係があると思われる。①は「逢坂」に「逢ふ」を掛け、④は「緒絶の橋」に「絶え」を掛けて、恋の歌ことばとして用いている。また、①は「聞きしかど」、④は「これならん」と伝聞や推定の表現を取っており、現実の地理に依拠した歌ではないことを示している。

①の歌は、逢坂の関は東路にあると聞いていたけれども、それは心づくしの種となる筑紫路の関だったのだなあと、逢瀬のなくなった恋を嘆く歌で、あえて地理的矛盾を示した機知的な歌である。その①を受けて④では、逢瀬を求めて「東路」の果ての「みちのく」まで来たが「緒絶の橋」を踏むことになってしまったという喩えにより、逢瀬も文のやり取りもままならなくなった恋に惑わされている苦境

を訴えたのであろう。また、都人にとって陸奥はよくわからない所であり、道の奥ゆえ橋も途絶えていることだろうと、「をだえの橋」の「絶え」のイメージに結びつけて陸奥が引き寄せられたと思われる。そこから「みちのくの緒絶の橋」という表現が生まれたと考えられる。

なお、道雅と當子内親王の密通事件の経緯は『小右記』寛仁元年（一〇一七）十一月条に記されている。[8] 一連の歌はその前後に詠まれたものであろうから、『源氏物語』が道雅の歌に基づいて「をだえの橋」を用いることはない。むしろ反対に道雅は、柏木の歌に「ふみ」の掛詞や「まどひ」の語があるのを踏まえながら、自らの歌に「をだえの橋」を取り入れたと考えられる。『河海抄』は、道雅の歌を掲げた直後に「案之近代哥也証哥如何」と疑問を呈しながらも、『伊勢物語』に業平より後代の河原左大臣の歌がある例を説いている。[9] 歌物語と作り物語の成立事情の違いを考慮せずに、道雅の歌を「証歌」としたのである。

道雅が「みちのくの緒絶の橋」と詠んでから、「をだえの橋」は陸奥の歌枕として受容されることになる。そこに『萬葉集』三八一五番歌の誤読に由来する「白玉の緒絶の橋」が合わさり、奥村氏の説くように「「しらたまの」の「玉」と「玉造」とが掛けられ、その玉造川にひかれて「緒絶橋」が陸奥の現地点（宮城県古川町）に到着した」[10] のである。

以上のように、「をだえの橋」が陸奥の歌枕となる発端は、『源氏物語』より後代の道雅の歌にある。それゆえ『源氏物語』は、「をだえの橋」を歌枕として用いたのではなく、柏木と玉鬘との仲を表す比喩として造語したのである。

三　「をだえの橋」の比喩するもの

『源氏物語』が「をだえの橋」を比喩として造語したのなら、「を」にも意味があることになる。「を」を「緒（ひも）」の意に取れば、「をだえの橋」は〈緒の切れた橋〉という意になる。前述の『源注餘滴』が「をだえの橋」を「みちのくの名所としてはおだやかにも聞えず」と不審を述べるのも、「をだえ」を「小絶え」ではなく「緒絶え」と受け止めたからであろう。そこで、「緒絶えの橋」がどのような橋の状態をいうのか、どのような意義が込められているのかについて考察する。

『倭名類聚抄』の橋の項目には「石橋」「浮橋」「土橋」「獨梁」があり、このうち緒を用いるのは浮橋である。[11] 浮橋は、舟を緒で繋いで

並べた上に板を渡したものである。「緒絶えの橋」は、緒の切れた浮橋、もしくは緒が対岸に結びつけられていないものをいうと考えられる。

だが、「をだえの橋」を緒の切れた浮橋と解するには、「浮橋」を単に「橋」と表した用例があるのかという問題点が残る。また、平安時代に「浮橋」は広く認知されていなかったようで、用例が少ない。歌ことばとしては、三代集には一例のみ見られる。

へだてける人の心のうき橋をあやうきまでもふみみつる哉

（『後撰和歌集』巻第十五・雑一・一一二二番・男の女の文を隠しけるを見て、もとの妻の書きつけ侍ける・四条御息所女）

修辞技巧としては、「うき橋」に「浮橋」と「憂き端」、「ふみ」に「踏み」と「文」を掛けており、「踏み」は「橋」の縁語である。掛詞「ふみ」があることは、柏木の「をだえの橋」の歌でも同様である。浮橋を「あやうき」と捉えていることが注目される。

先行文学の『竹取物語』『伊勢物語』『土佐日記』『蜻蛉日記』、また後代の『更級日記』には、「浮橋」の用例がない。『うつほ物語』には、

大将殿は、池広く深く、色々の植木岸に添ひて生ひたり。水の上に枝さし入りなどしたる中島に、片端は水にのぞき、片端は島にかけて、いかめしき釣殿造られて、をかしき舟ども下ろし、浮橋渡し、暑き日盛りには人々涼みなどしたまふに、

（①「祭の使」四六三頁）

と、中島にある「いかめしき釣殿」に浮橋を架けたことが描かれている。正頼邸の釣殿は、対屋から南にのびる中門廊の先端に池に臨んであるのではなく、中島にある。そこに「浮橋渡し」と描くことにより、池の大きさと正頼の権勢が誇示されているのである。

『枕草子』には「をつの浮橋（能因本では「をののうきはし」）」（六二段「橋は」）と名があげられているが、所在は未詳である。このように、実景として描かれる浮橋は、先行文学では『うつほ物語』の池の中島に架けたもの以外に見当たらない。

ところが、『源氏物語』においては、浮橋が巻名「夢浮橋」に用いられているほか、「夢のわたりの浮橋か」（②「薄雲」四四〇頁）と光源氏が嘆息し、冷泉帝の大原野行幸の折に見物の牛車が参集する場面では、桂川に渡した浮橋への言及がある。

めづらしうをかしきことに、競ひ出でつつ、その人ともなく、かすかなる脚弱き車など輪を押しひしがれ、あはれげなるもあり。浮橋のもとなどにも、好ましう立ちさまよふよき車多かり。

西の対の姫君も立ち出でたまへり。　（③「行幸」二九〇頁）

冷泉帝の大原野行幸の描写は、『吏部王記』記載の醍醐天皇の大原野行幸に多く準じており、そこに浮橋の説明がある。

延長六年十二月五日、大原野行幸、卯初上御輿、自朱雀門至五條、路西折到桂河邊、上降輿就幄、群臣下馬、上御輿、群臣乗馬渡橋、方舟、其上爲輿敷板、自桂路入野口、　（『吏部王記』二一～二二頁）[12]

「橋」としか表記されていないが、直後の割り注「方舟、其上爲輿敷板」は、浮橋についての説明である。この例のあることから、柏木の「をだえの橋」の「橋」が、浮橋を表すと考えてよいことになる。

「上御輿、群臣乗馬渡橋」という記述からは、浮橋が帝の御輿だけでなく群臣が馬上したまま渡れるほどの規模のものであることがわかる。また、割り注の「爲輿敷板」という記述から、御輿のために板を敷いて浮橋をあつらえたことがわかる。醍醐帝が大原野行幸で桂川を渡るために、この浮橋は仮設されたのである。

『源氏物語』が「浮橋のもとなどにも、好ましう立ちさまよふよき車多かり」と、多くの「よき車」がわざわざ桂川の浮橋のもとまで来たことを描くのは、仮設の浮橋渡御を見物としたからである。玉鬘の牛車も「よき車」の一つなのであろうか、この描写の直後に、「西の対の姫君」玉鬘が冷泉帝を拝顔することが描かれている。桐壺帝、朱雀帝の御代に大原野行幸は描かれていなかった。人々は初めて目にする浮橋の壮観さに驚きながら、御輿や馬上の群臣の渡橋を待っているのである。

また、冷泉帝にとっても、桂川を浮橋で渡ることは意義深いものであったろう。というのも、かつて冷泉帝は、光源氏が桂の院にいると聞いた折に、

「月のすむ川のをちなる里なれば桂のかげはのどけかるらむ
うらやましう」とあり。　（②「松風」四一九頁）

と、桂川の向こうの里に関心を示す歌を送っていたからである。それに対して光源氏は、

久かたの光に近き名のみしてあさゆふ霧も晴れぬ山里
行幸待ちきこえたまふ心ばへなるべし。　（同四二〇頁）

と、行幸をお待ち申し上げる意の歌を詠んでいた。

その時から五年経って、ようやく大原野行幸において桂川を浮橋で渡ることができるのである。行幸に参加しなかった光源氏が冷泉帝に送る歌は、故実を踏まえながら行幸の盛大さを讃えるものである。

をしほ山みゆきつもれる松原に今日ばかりなる跡やなからむ　（③「行幸」二九三頁）

松風巻の「行幸待ちきこえたまふ心ばへ」の「待ち」を響かせて、「松原」に掛けた「待つ」がある。

冷泉帝と光源氏が五年前から待ち望んでいた行幸が、醍醐帝の大原野行幸を踏まえて描かれるのは、冷泉帝の治政が醍醐帝の治政に匹敵するようになったことを示すためであろう。浮橋は、聖代の証しといえる。

ところで、加藤静子氏は「六条院より、御酒、御くだものなど奉らせたまへり」（③「行幸」二九二～二九三頁）について、宇多上皇が我が子醍醐天皇の野行幸に参加せずに、酒以下の品々を贈った延長六年の準拠にのっとっており、「潜在的には源氏が冷泉帝実父として存在する様が、この野行幸にも刻まれている」ことを指摘する[13]。大原野行幸は、光源氏の実子冷泉帝が醍醐天皇のように聖代を築いたことを提示しているのである。

光源氏と冷泉帝が実の父子であることは、玉鬘の目を通して「別物とも見えたまはぬ」ほどの容貌の酷似という面からも描かれている。そこでは、冷泉帝と内大臣や柏木たちの容貌も比較されている。

帝の、赤色の御衣奉りてうるはしう動きなき御かたはら目に、なずらひきこゆべき人なし。わが父大臣を、人知れず目をつけたてまつりたまへど、きらきらしうものきよげに盛りにはものしたまへど、限りありかし。いと人にすぐれたるただ人と見えて、御輿の中よりほかに、目移るべくもあらず。まして、容貌ありや、をかしやなど、若き御達の消えかへり心移す中少将、何くれの殿上人やうの人は、何にもあらず消えわたれるは、さらにたぐひなうおはしますなりけり。源氏の大臣の御顔ざまは、別物とも見えたまはぬを、思ひなしのいますこしいつかしう、かたじけなくめでたきなり。　（③「行幸」二九一頁）

冷泉帝の「動きなき御かたはら目」について、『河海抄』は「是範曰人主之躰如山岳焉高峻而不動旧記」と指摘する[14]。唐の太宗の『帝範』君体篇を典拠とする「高峻而不動（高峻にしてゆるぎない）」冷泉帝に、「なずらひきこゆべき人」はなく、玉鬘の父内大臣さえ「いと人にすぐれたるただ人」と見える。

まして柏木中将は、「若き御達の消えかへり心移す中少将、何くれの殿上人やうの人」とひっくるめて、「何にもあらず消えわたれる」

と玉鬘には見える。「消えわたれる」は、（御達が柏木達を）「消えかへり心移す（死なんばかりに慕っている）」とある「消えかへり」と照応するが、あまり見られる表現ではない。三代集では類似の表現が一首見られる。

君に今朝朝の霜のおきて去なば恋しきごとにきえやわたらむ　（『古今和歌集』仮名序・三つには、なずらへ歌）

「きえやわたらむ」で、霜が消えるように消え入りそうな悲しい恋心を表している。「消えわたれる」を、恋心の強調ではなく容貌に用いるのは、「消え（消ゆ）」に死ぬの意もあるので不吉な感じがする。何も知らない玉鬘の目を通して、光源氏の実の長男冷泉帝の「動きなき」容貌が、内大臣の長男柏木たちを圧倒的に凌駕することを示すために、「消えわたれる」が用いられたと考えられる。

冷泉帝と柏木の容貌の懸隔に対応するように、二人に関わる橋も対照的に設定されるのであろう。「動きなき」冷泉帝は浮橋を渡って聖代を築いたことを示すが、「消えわたれる」柏木はこの後「をだえの橋にふみまどひける」と、緒の切れた浮橋に足を踏み入れ惑ったと詠むことになる。

以上のように、柏木の詠んだ「をだえの橋」は〈緒の切れた浮橋〉を意味し、それは冷泉帝の聖代を象徴する「浮橋」を踏まえて、それとは対照的に設定されているのである。

四　「をだえの橋」の歌

「をだえの橋」が〈緒の切れた浮橋〉を意味するのなら、「をだえの橋」の歌の解釈も変わる。「をだえの橋」の歌がどのようなイメージを詠んだものであるかについて考察する。

「妹背山ふかき道をばたづねずてをだえの橋にふみまどひけるよ」と恨むるも人やりならず。

まどひける道をば知らで妹背山たどたどしくぞたれもふみみし　（③「藤袴」三四一頁）

柏木と玉鬘は共に歌枕「妹背山」を詠んでいるので、「をだえの橋」はそこに架けようとした橋ということになる。妹背山は、新編全集の頭注に「歌枕「妹背山」は、大和の吉野川にも、紀伊の紀の川にも、その両岸に向きあう山としてあり、ここでは、姉弟の意をこめる」

（同頁）とある。柏木は、吉野川か紀の川の妹背山に「をだえの橋」を想定したことになる。ただ妹背山は二カ所あるが、吉野川と紀の川は一続きの川である。大和と紀伊の国境であった真土山より上流を吉野川、下流を紀の川と呼ぶ。平安時代には紀の川を詠んだ歌がなく、すべて吉野川と見ていたようである。[15]

冷泉帝の大原野行幸に供奉して桂川を浮橋で渡った折の柏木の記憶が、妹背山の間を流れる吉野川に「をだえの橋」を思い描かせたのであろう。柏木は「をだえの橋」に、姉弟ゆえ恋の成就しない、つまり渡り切れるはずもない浮橋の意を込めたのである。すなわち「をだえの橋」は、背山と妹山の間の吉野川に架けた浮橋であり、その浮橋の緒が途中で切れているか、妹山側に緒が結びつけられていないものをいうことになる。「をだえの橋にふみまどひける」は、（吉野川で）緒の切れた浮橋に足を踏み入れ惑った、という意になる。

では、「をだえの橋」を想定した吉野川はどのようであったか。「吉野川」のイメージを三代集に探ってみる。

a 吉野河岸の山吹ふく風に底の影さへうつろひにけり
（『古今和歌集』巻第二・春歌下・一二四番・吉野河のほとりに、山吹の咲けりけるを、よめる・貫之）

b 吉野河いはなみ高く行水のはやくぞ人を思そめてし
（同・巻第十一・恋歌一・四七一番・紀貫之）

c 吉野河岩きりとおし行水のをとにはたてじこひは死ぬとも
（同・巻第十一・恋歌一・四九二番・読人しらず）

d 吉野河水の心ははやくとも滝のをとには立てじとぞ思
（同・巻第十三・恋歌三・六五一番・よみ人しらず）

e あふことは玉の緒許名のたつは吉野のかはのたぎつ瀬のごと
（同・巻第十三・恋歌三・六七三番・よみ人しらず）

f 吉野河よしや人こそつらからめはやく言ひてし事はわすれじ
（同・巻第十五・恋歌五・七九四番・躬恒）

g 流ては妹背の山のなかに落つる吉野の河のよしや世中
（同・巻第十五・恋歌五・八二八番・読人しらず）

h 花ざかりまだも過ぎぬに吉野河影にうつろふ岸の山吹
（『後撰和歌集』巻第三・春下・一二一番・題しらず・よみ人も）

i 見れど飽かぬ吉野の河の流ても絶ゆる時なく行かへり見む
（『拾遺和歌集』巻第九・雑下・五七〇番・反歌・人麿）

九首の吉野川を詠んだ歌の中で、bcdefgの六首は恋歌の部にある。bcは岩の間を流れる水を詠み、degは吉野川に滝のイメージを重ね見る。吉野川には、宮滝がある。恋歌においては、吉野川は妹山と背山を隔てる川として見られるからであろう、滝のように激しい流れの川と強調して詠まれる傾向がある。

ところで、柏木が「をだえの橋」を詠む以前に「吉野の滝」という表現があった。玉鬘の宮仕えが決まり、懸想人たちの懇願を女房が断る場面である。

誰も誰もいと口惜しくて、この御参りのさきにと心寄せのよすがよすがに責めわびたまへど、吉野の滝を堰かむよりも難きことなれば、「いとわりなし」とおのおの答ふ。（③「藤袴」三三八頁）

玉鬘に近づくのは「吉野の滝」を堰き止めることよりも困難であるという。いわば玉鬘と求婚者たちとの間には「吉野の滝」のあることを前提とした喩えであり、柏木が「妹背山」を詠む伏線になっていたのである。

柏木の「をだえの橋」の歌の裏の意は、姉弟の仲とも知らずに（滝のように激しい流れの吉野川を背山側から妹山側に渡ろうとして）、緒の切れた浮橋に足を踏み入れ途方に暮れたことよ、となる。『源注餘滴』が「をだえの橋」を「おだやかにも聞えず」と指摘しただけでなく、吉野川の激しい流れのイメージもあいまって、柏木の「をだえの橋」の歌は危険で不吉な喩えをしたということになる。

五　「ふみまどひ」の語脈

行幸巻の浮橋は、冷泉帝が大原野行幸の盛儀を成し遂げ、御代が聖代であることを示す証しであった。それに対する「をだえの橋」もまた、柏木の位相を象徴するものであることが推察される。

柏木の「をだえの橋」の歌は、玉鬘を異母姉とも知らずに恋をして「文」を出したという過去を詠んだ歌である。ところが、この歌の「ふみまどひ」が示す「文」の惑いと足の踏み惑いとは、女三の宮への恋においても同様に繰り返されて、重大な事態を招くことになる。すなわち、柏木は人妻の女三の宮に「文」を出して密通が露見し、また、舞・蹴鞠・「乱り脚病」と足の乱れが高まったあげくいざるようになり、亡くなってしまうのである。そこに「ふみまどひ」の語脈を読み取ることが可能であると思われる。[16]

「をだえの橋」の歌以降、女三の宮への恋において「ふみまどひ」が語脈として繰り返され高められていることを確認し、「をだえの橋」の歌が柏木の恋死と関わっていることを述べたい。

前もって「ふみまどひ」の辞書的意味を確認しておく。掛詞「ふみ」の「文」は、玉鬘と女三の宮に送る手紙の意として用いられるだ

けであるが、「踏み（踏む）」には「踏み歩く。行く。進む。通る。調子をつけて足踏みする。舞う」などの意がある。「まどひ（まどふ）」は「迷う。さまよう。途方に暮れる。心が乱れる。あわてふためく」などの意があり、また動詞の連用形について「ひどく……する。ひたすら……する」の意を表す。それゆえ「文まどひ」は文が迷うことを、「踏みまどひ」は（をだえの橋に）足を踏み入れ途方に暮れる、（落蹲を）舞い乱れる、（蹴鞠で）足を踏み乱れる、（乱り脚病で）踏み歩き乱れる、などの意となるだろう。柏木の恋心の乱れが文の迷いや足の動作に表象されるところに、「ふみまどひ」の語脈があると考える。

まず、「ふみ」を「文」と取った場合から確認する。柏木が玉鬘に送った結び文は、光源氏が引き開けて見ることになる。

みな見くらべたまふ中に、唐の縹の紙の、いとなつかしうしみ深う匂へるを、いと細く小さく結びたるあり。「これはいかなれば、かく結ぼほれたるにか」とてひきあけたまへり。手いとをかしうて、

思ふとも君は知らじなわきかへり岩漏る水に色し見えねば

書きざまいまめかしうそぼれたり。　（③「胡蝶」一七七頁）

ここには「文」「まどひ」の語はない。ところが、女三の宮が隠した柏木の文を光源氏が引き出して見る場面では、「まどひ」に類似する「まよひたる」という表現と「文」の語がある。

御褥のすこしまよひたるつまより、浅緑の薄様なる文の押しまきたる端見ゆるを、何心もなく引き出でて御覧ずるに、男の手なり。紙の香などいと艶に、ことさらめきたる書きざまなり。二重ねにこまごまと書きたるを見たまふに、紛るべき方なくその人の手なりけりと見たまひつ。　（④「若菜下」二五〇頁）

このこまごまと書かれた文は、光源氏が二、三日女三の宮のもとにいると聞いた柏木が「おほけなく心あやまりして」（④「若菜下」二四七頁）送ったものである。柏木の光源氏への嫉妬、いわば心の「まどひ」を表す「文」は、女三の宮が「えよくも隠したまはで、御褥の下にさしはさみたまひつ」（同二四八）と隠し損なう。そこで御褥の「まよひ」が引き起こされて、文の端がのぞいたのである。「文まどひ」が褥の「まよひ」に転化されて、存在感を示したのだと思われる。

次に、「ふみ」を「踏み」と取った場合を確認する。柏木が玉鬘に文を送り、光源氏の許しがあったと聞き知った場面では、

大臣の御ゆるしを見てこそかたよりにほの聞きて、まことの筋をば知らず、ただひとへにうれしくて、下り立ち恨みきこえまどひ歩

くめり。　（③「胡蝶」一九二頁）

と、胡蝶巻の巻末に、柏木の「まどひ歩く」様子が描かれている。柏木の恋するさまは、「をだえの橋」の歌に「踏みまどひける」と詠まれたように、以後足の描写により象徴的に描かれていく。

先行研究では、葛綿正一氏が柏木と光源氏の密通事件を「華麗な足の挫折」と見て、柏木の蹴鞠以降の足の描写に着目する。[17] しかしそれ以前にも、直接的な足の描写ではないが、二条院で行われた紫の上主催の御賀の精進落しにおける舞の描写がある。夕霧と柏木とが舞うさまは、かつて光源氏と頭中将とが青海波を舞った折の記憶を引き出して語られている。

日暮れかかるほどに、高麗の乱声して、落蹲の舞ひ出でたるほど、なほ常の目慣れぬ舞のさまなれば、舞ひはつるほどに、権中納言、衛門督おりて、入り綾をほのかに舞ひて、紅葉の蔭に入りぬるなごり、飽かず興ありと人々思したり。いにしへの朱雀院の行幸に、青海波のいみじかりし夕、思ひ出でたまふ人々は、権中納言、衛門督のまた劣らずたちつづきたまひにける、世々のおぼえありさま、容貌、用意などもをさをさ劣らず、官位はやや進みてさへこそなど、齢のほどをも数へて、なほさるべきにて昔よりかくたちつづきたる御仲らひなりけりとめでたく思ふ。主の院も、あはれに涙ぐましく、思し出でらるることども多かり。　（④「若菜上」九五頁）

「落蹲」は二人舞の納曽利の一人舞であるというが、『枕草子』に「落蹲は、二人して膝踏みて舞ひたる」（二〇三段「舞は」三三八頁）とあるので、現行の納曽利に相当するようだ。納曽利は、次のように竜の遊ぶ姿の舞であると説明されている。

一名《双竜舞》《落蹲》。由来は不明であるが、雌雄の竜が楽しげに遊ぶ姿の舞といわれ、昔は勝負の時に右方の勝者を祝って奏したことが多かったという。[18]

夕霧と柏木は「高麗の乱声」で登場した「落蹲」の舞が「常の目慣れぬ舞のさま」であることに心惹かれ、「入り綾」を舞う。「入り綾」は、降台する直前の舞であるという。

当曲舞が終り、さらにその楽曲を奏すると、舞いながら後面向に一列になり順次降台するが、降台する舞人以外は舞いつづける。この作法を入綾という。[19]

夕霧と柏木は落蹲の入り綾を舞い、竜の遊ぶ姿を真似て片膝をつく。舞の所作ではあるものの、足の運びを少しだけ乱したことになる。夕霧はすでに「野分」巻で紫の上を垣間見て心惹かれており、父光源氏が藤壺を思いながら試楽で青海波を舞った時と同様の立場にある。

だが、物語は夕霧ではなく柏木にずらして密通の役割を負わせていく。

柏木が降嫁を願った女三の宮は六条院におり、その後柏木は六条院での蹴鞠の折に女三の宮を垣間見することとなる。玉上琢彌氏は蹴鞠の場面に「乱りがはしき」という語が頻出することを指摘し、それ以降の足の描写については詳しい先行研究がある。[20] 柏木の蹴鞠は「足もとに並ぶ人なかりけり」「さすがに乱りがはしき、をかしく見ゆ」（④「若菜上」一三八～一三九頁）と、卓越した「乱りがはしき」足の所作が描かれている。「踏みまどひ」の高まりが、他者からの賞賛を伴いながら描かれているのである。

六年後、六条院に忍び入り女三の宮と契った後は、「恐ろしくそら恥づかしき心地して、歩きなどもしたまはず」（④「若菜下」二二九頁）、「思ひのままにもえ紛れ歩かず」（同二三〇頁）、「明かき所にだにえゐざり出でたまはず」（同頁）、「ながめ臥したまへり」（同二三二頁）と、罪の恐ろしさから足の動きが自制される。光源氏に「文」が見つけられたことを知ると、「内裏へも参らず」（同二五八頁）と、さらに足の動きが低下していく。

だが柏木は、光源氏が試楽に召した折に、外出できない理由を「春のころほひより、例もわづらひはべる乱り脚病といふものところせく起こりわづらひはべりて、はかばかしく踏み立つることもはべらず」（④「若菜下」二七六頁）と語っている。柏木が女三の宮と密会したのは「四月十余日ばかり」（同二二三頁）と夏のことであり、密会以前の「春のころほひ」から持病の「乱り脚病」は悪化していたことになる。

柏木の自意識とは関わりなく「乱り脚病」という病気が進行していることを、物語は描いている。「乱り脚病」は、「高麗の乱声」への傾倒や落蹲の膝をつく所作、蹴鞠の「乱りがはしき」足の所作、という「踏みまどひ」の流れが病として顕現したものと言える。柏木は、乱り脚病を患いながら女三の宮と密通し、その後に足の動きが低下したのである。柏木の足の描写は、女三の宮への最後の「文」を託した後の「泣く泣くゐざり入りたまひぬれば」（同二九七頁）で終わっている。

それはあたかも、妹山と背山の間を流れる吉野川の急流で、緒の切れた浮橋の上を踏み乱れながらやがて立っていられなくなるさまを、時間をかけて演じているかのようである。

さらに、柏木の死は「泡の消え入るやうにて亡せたまひぬ」（④「柏木」三一八頁）と、吉野川に落ちたことを暗示する表現を取る。新編全集頭注（同頁）は、類似した表現として友則の歌二首を掲げている。

水の泡のきえでうき身といひながら流て猶もたのまるゝ哉

（『古今和歌集』巻第十五・恋歌五・七九二番・題しらず・友則）

うきながらけぬる泡ともなりななむながれてとだに頼まれぬ身は

（同八二七番・友則）

一首目は水の泡が消えずに浮いて流れることを、二首目は浮いたまま消える泡になることを、恋への期待感の有無に絡ませて詠んでいる。二首目、すなわち『古今和歌集』八二七番歌の直後は恋歌の部の掉尾を飾る歌で、前掲の吉野川を詠んだ歌gである。

g流ては妹背の山のなかに落つる吉野の河のよしや世中

（同八二八番・読人しらず）

「妹背山」の間をたぎり落ちる「吉野川」の流れに重ね合わせた、恋の不首尾を泣く歌である。これら三首の和歌的発想を参考にすれば、「泡の消え入る」は、柏木が「をだえの橋」から落ちて吉野川を流れ、息が途絶えるイメージを表していると読み解ける。

また、「泡の消え入る」は、大原野行幸の折に玉鬘が柏木を「消えわたれる」と見たこととも響き合っている。そうであれば、大原野行幸で「浮橋」を描いた折に、柏木に「をだえの橋」を詠ませることが構想されていたことになる。

以上のように、柏木の「をだえの橋」の歌は、女三の宮への恋において「文まどひ」「踏みまどひ」の語脈を形成しながら、柏木が「泡の消え入る」ように亡くなるという展開を拓いたのである。

六　おわりに――血脈の言葉としての「ふみまどひ」――

柏木の「をだえの橋」の歌の意義を再確認した上で、歌に詠まれた「踏みまどひ」が息子薫に引き継がれることを述べたい。

前述のように、『源氏物語』の登場人物柏木は、「をだえの橋」を陸奥の歌枕としてではなく、具体的な比喩として用いている。柏木は玉鬘に恋したものの異母姉であると知り、恋のかなうはずもない仲であったことを「をだえの橋」すなわち〈緒の切れた浮橋〉に喩えたのである。

柏木が「をだえの橋」を詠む背景には、大原野行幸に供奉した折に「浮橋」を乗馬したまま渡った体験がある。大原野行幸では、光源氏の実の長男冷泉帝の「動きなき御かたはら目」に比較すると、内大臣の長男柏木たちは「何にもあらず消えわたれる」と見えるほどで

あった。容貌の懸隔に相応して、冷泉帝の聖代を象徴する「浮橋」と柏木の位相を表す「をだえの橋」との懸隔がある。

柏木の「をだえの橋」の歌の第五句「ふみまどひける」は、その後語脈を形成して、女三の宮への「文」が惑い、恋に「踏み」惑うさまを印象づけていくことになる。柏木が玉鬘に詠み掛けた「をだえの橋」の歌は、女三の宮への恋の基調となり、恋死の物語を展開したのである。

ところが、柏木の踏み惑う足は、柏木の死で終わらず息子薫に引き継がれていくようである。柏木の足の描写は、女三の宮への最後の「文」を侍従に託した後の「泣く泣くゐざり入りたまひぬれば」（④「柏木」二九七頁）が最後である。それを受けるように、柏木巻の巻末は「秋つ方になれば、この君はゐざりなど」（同三四一頁）とあり、薫の足の描写が始まる。

柏木が浮舟と初めて詠み交わした歌には「橋」と、「あやぶむ」に掛けて「踏む」が、浮舟の答歌には「絶え」が詠まれており、柏木の歌「妹背山ふかき道をばたづねずてをだえの橋にふみまどひける」と共通の語を持つ。

「宇治橋の長きちぎりは朽ちせじをあやぶむかたに心さわぐな
いま見たまひてん」とのたまふ。

（⑥「浮舟」一四五～一四六頁）

絶え間のみ世にはあやふき宇治橋を朽ちせぬものとなほたのめとや

答歌で浮舟が「絶え」を詠むのは、宇治橋を詠んだ次の一首があるからである。

わすらるゝ身をうぢ橋の中たえて人もかよはぬ年ぞへにける

（『古今和歌集』巻第十五・恋歌五・八二五番・よみ人しらず）

薫が宇治橋に託した浮舟との契りは、この歌を踏まえれば中絶えすることになる。それにもかかわらず、薫は「衣かたしき今宵もや」（⑥「浮舟」一四七頁）と、下句に「我を待つらん宇治の橋姫」とある歌を朗唱し、「橋姫」に喩えた浮舟が自分を待っているだろうとの思いを表して匂宮の嫉妬心を誘う。この時すでに匂宮は浮舟と契りを結んでいる。

かつての光源氏の実子冷泉帝と内大臣の息子柏木との、容貌と「浮橋」をめぐる懸隔の構図が、浮舟巻では、光源氏の孫匂宮と内大臣の実の孫薫との、美的特性「匂」「薫」と「橋姫」浮舟をめぐる対立に移行されたことになる。

だが、失踪した浮舟の生存を、匂宮の母明石中宮は薫にだけ伝えたために対立構造が解かれ、薫だけが「橋姫」浮舟を求め続けること

になる。浮舟への「文」を託した薫は、返事をもらえず「ふみまどふかな」と詠むことになる。物語中最後に薫が詠むこの歌は、柏木の「をだえの橋」の歌の「山」「道」「たづね」「ふみまどひ」を踏まえており、強い照応関係が見られる。

（柏木）妹背山ふかき道をばたづねずてをだえの橋にふみまどひける

（薫）　法の師とたづぬる道をしるべにて思はぬ山にふみまどふかな　（⑥「夢浮橋」三九二頁）

柏木の「ふみまどひける」を、薫は「ふみまどふかな」と詠んで、血脈の言葉として引き継いだことを示しているのである。[21][22]

なお、この歌が収められた「夢の浮橋」の巻名について、『河海抄』は「此巻を夢浮橋と題する事詞にもみえす哥にもなし古来の不審也」「此巻に夢といふ詞五カ所あり」と指摘する。[23]巻中に「夢」の語はあっても「浮橋」の語はない。だが匂宮には、もし帝位に就けば行幸で浮橋を渡るという可能性が残されている。一方薫は、父柏木が「をだえの橋」、〈緒の切れた浮橋〉に踏み惑ったように、「橋姫」を求めて踏み惑うばかりである。「夢浮橋」は、光源氏と内大臣の息子の「浮橋」をめぐる明暗が、孫の世代に移行されたことを暗示する命名であると考える。[24]

注

（1）『源氏物語』『萬葉集』『枕草子』『うつほ物語』『狭衣物語』の本文の引用は、「新編日本古典文学全集」によった。

（2）「をだえの橋」について最初に触れたのは『河海抄』で、「みちのくのをだえの橋や是ならんふみゝふますみ心まとはす」と道雅の歌を掲げ、直後に「案之近代哥也証哥如何」と疑問を呈しながらも、『伊勢物語』に業平より後代の河原左大臣の歌がある例を掲げている（玉上琢彌編『紫明抄・河海抄』四三〇頁、角川書店、一九九一年七版）。

（3）市島謙吉編『源注餘滴』三四二頁、國書刊行會、一九〇六年。

（4）池田亀鑑編『源氏物語事典』上巻、五八〇～五八一頁、「をだえのはし」の項目、東京堂、一九六〇年。

（5）奥村恒哉「第二章　をだえのはし――『万葉集』の誤読から生じた歌枕――」九四頁（『歌枕』平凡社、一九八四年第三刷。初版は一九七七年）。

（6）同（4）。

（7）勅撰和歌集の引用は「新日本古典文学大系」によった。

（8）『小右記』寛仁元年（一〇一七）十一月条に「卅日、甲子、師通朝臣云、前斎宮依病為尼、此親王、故院御存生時、為三位中将道雅被密通、其後母后不出宮中之間、今依重病出家、故院令勘當道雅之程崩給」とある（大日本古記録『小右記』四、二八八頁、岩波書店、一九六七年）。

（9）同（2）。

（10）同（5）。

（11）京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成　倭名類聚抄』一五八～一五九頁、臨川書店、一九六三年再版。

（12）『吏部王記』二一～二二頁（『史料拾遺』第三巻、臨川書店、一九六九年）。

（13）加藤静子「大原野行幸の準拠と物語化」（『源氏物語の鑑賞と基礎知識』行幸・藤袴、二四五頁、竹林舎、二〇〇三年）。

（14）同（2）四二三頁。

（15）『狭衣物語』では、狭衣が粉川詣の折に、紀の川の妹背山の見える所で「吉野川」を詠んでいる（『狭衣物語』①二九六頁）。

（16）語脈については、鈴木日出男氏の「語義を一回一回多様に変容しながら繰り返すことによって、物語の主題が支えられている」という説を支持したい（鈴木日出男「語脈」『國文學』四〇頁第二八巻一六号、學燈社、一九八三年）。

（17）葛綿正一「平安朝文学における身体の主題――足と沓をめぐって――」六五頁（『日本文学』一九九四年六月）。葛綿正一氏は、光源氏の青海波の舞「同じ舞の足踏面持ち、世に見えぬさまなり」（①「もみぢの賀」三一一頁）と柏木の蹴鞠「衛門督のかりそめに立ちまじりたまへる足もとに並ぶ人なかりけり」（④「若菜上」一三八頁）から始まる足の描写に着目して「光源氏の密通事件も柏木の密通事件も華麗な足の挫折の物語として要約することが十分可能であろう」と説いている。

（18）東儀信太郎『雅楽事典』一八六頁、音楽之友社、一九八九年。

（19）同（18）二三〇頁。

（20）玉上琢彌氏は「この蹴鞠の場面、しきりに「みだり」「みだりがはし」が出る」と指摘する（玉上琢彌『源氏物語評釈』第七巻二四五頁、角川書店、一九八七年十二版）。また、竹田誠子氏は「乱りがはし」に着目して「柏木物語は、蹴鞠の場を始発に据えている」と説く（「「乱りがはし」き柏木――言語空間としての蹴鞠と脚病――」『人物で読む『源氏物語』』第十六巻、二六三頁、勉誠出版、二〇〇六年。

（21）血脈の言葉については、針本正之氏が夕顔・玉鬘母子の「おほどか」が二人の血脈を繋ぐものであることを指摘し、その意義を解き明かしている（『平安女

流文学の表現』九〇～九七頁、おうふう、二〇〇一年）。同様に、玉鬘の異母弟柏木とその子薫にも「ふみまどひ」が血脈の言葉としてあり、薫の恋のあり方を規定するものであると考える。

（22）今井上氏は「をだえの橋」を「ふっつりと絶えるという名の「緒絶えの橋」」と歌枕と認めた上で、「薫の「踏み惑ふ」「夢浮橋」の一首と、柏木の「踏み惑ふ」た「緒絶えの橋」の歌との響鳴」を指摘する（「踏み惑う薫の「夢浮橋」」『源氏物語　表現の理路』二一五～二一七頁、笠間書院、二〇〇八年）。初出「踏み惑う薫と夢浮橋―宇治十帖の終末についての試論――」『中古文学』第六十八号、二〇〇一年十一月。

（23）同（2）六〇〇頁。

（24）『枕草子』能因本の六五段「橋は」（「日本古典文学全集」）にある「小野の浮橋」が認知されていたのなら、浮舟の住む「小野」は、浮橋との関わりゆえ設定された可能性がある。